

『榻嶋暁筆』の「盤古王」説話研究ノート

——「神在経云」の記述をめぐって——

小 椋 愛 子

一、はじめに

『榻嶋暁筆』は、約三五〇篇の説話を所収するが、その大部分は典拠を有し、それを忠実に引くものが多い。典拠が日本の書物の場合は出典を明記しないことが多く、逆に漢籍の場合は明記する傾向にある。また、典拠は、経典、漢籍、軍記物語、説話集、歌論集など多岐にわたる。

これまで、『榻嶋暁筆』の説話の出典を探り、その受容と変容のあり方を考えてきた。本稿では、巻一、第五「衆生」中に見える、中国の創生神話「盤古王」の記述を取り上げるが、その中でも「神在経云」として引用する記述に注目したい。「盤古王」は、中国創世の祖として知られているが、『榻嶋暁筆』は、「神在経云」として、「盤古王」の子が五帝龍王との説を述べる。そこにあらわれる「神在経」とは、いかなる書物なのか。『榻嶋暁筆』の多くの説話が、常に何らかの典拠を有しているという事実からすると、本説話も何らかの出典に基づくか、あるいは参照に付した書物があると考えるのが自然であろう。「盤古王」の記述の特異性を明らかにし、その意味についていささか考えてみたい。

二、盤古王について

盤古は、中国で、天地を創造したとされる天子の名である。日本の書物で、古くは、『経国集』⁽¹⁾にその名がみえる。卷二「文章生大初位上紀朝臣真象上」の文字の歴史の対策文で、次のようである。

問。上古淳朴。唯有^二結繩^一。中葉澆醜。始造^二書契^一。是知三五六經由^レ文垂^レ教。未^レ審三七十二君何字刻^二石子^一。貫^二穿墳典^一該^二博古今^一。既辨^二三家之疑^一。亦探^二百氏之奧^一。愁陳^二精辨^一。俟^レ祛^二茲惑^一。

臣聞。……盤古之際難^レ詳。七十二君。皇極之猷可^レ驗。

と、「盤古」を大昔・太古の意で用いている。中世では、『愚管抄』⁽²⁾卷一に漢家年代の第一として

盤古 天地人定後之首君也。

とあり、天子として認識されていることがわかる。さらに、『神皇正統記』⁽³⁾神代に、次の記述がある。

震旦ハコトニ書契ヲコトスル國ナレドモ、世界建立ヲ云ル事タシカナラズ。……但異書ノ説ニ、混沌未分ノカタチ、天・地・人ノ初ヲ云ルハ、神代ノ起ニ相似タリ。或ハ又盤古ト云王アリ。「目ハ日月トナリ、毛髪ハ草木トナル。」ト云ル事モアリ。

傍線部分、盤古の目が日月となり、毛髪が草木となるという記述は、後世、『塵袋』などに引き継がれる。また、『正法眼蔵』⁽⁴⁾第十九「古鏡」にも、大昔・太古の意味ではあるが、用例がみえる。

……「漢来漢現」は、この「漢」は混沌よりこのかた、盤古よりのち、三才・五才の現成せるといひきたれるに、いま雪峰の道には、古鏡の功德の漢現せり。

しかし、いずれも、「盤古」そのものの説明、記述は少ない。その他、盤古は、中世の『日本書紀』の注釈書、神道書、

陰陽道の曆数書・曆注といわれる『篋篋内伝』等に散見される。これらは、次章で、取り上げることとする。(以下、引用する漢籍は、全て私に返り点、句読点を付す。)

三、『榻嶋曉筆』の盤古王の記述をめぐって

『榻嶋曉筆』は、卷一・第五「衆生」で、「本朝」、「震旦」、「天竺」それぞれの人類の起こりを説明するが、その「震旦」の起こりの一例として、盤古の説話を引く。

次震旦の元紀をいはゞ、天地未分の時、一氣渾沌として形鶏子のごとくなりしが、初て開て先天ありて後に地さだま^スる。此天地の氣即化して人世となる。いはゆる盤古王これ其祖なり。

(『榻嶋曉筆』⁵ 卷一・第五「衆生」)

盤古が、天地を開闢したことを述べ、次に「北山云」として続ける。

北山云、天高事一丈、地厚事一丈、盤古長一丈、頭東を極め、足西を極め、左手南を極め、右手北を極め、目を開^クひるとし、目を閉るを夜とし、呼を暑とし、吸を寒とし、呼氣は風雲となり、吐氣は雷霆となる。四時行、万物を生ずといへり。此君世を治給ふ事、一万八千才崩じ給て後、両眼日月と成ともいへり。三皇五紀其裔にあらずといふ事なし。故に盤古は天地開闢の王也といへり。

「天地」と共に「盤古」が成長し、盤古の頭、足、左手、右手が「東西南北」に、さらに、目が日と月になったとする。「北山云」の「北山」は、書名であろう。『山海經』の中に「北山經」、「海外北經」、「大荒北經」があり、これを指すか。しかし、『山海經』に、盤古の記述はない。但し、「海外北經」、「大荒北經」に、盤古とよく似た性質を持つ神、「燭陰」、「燭龍」の記述があり、あるいはこれと混同したのではないか。これについては、後述する。

さて、『榻嶋曉筆』傍線部分の天地が分かれる前の様子、「北山云」の記述の前半と末尾の表現は、唐の類書、『芸文類聚』⁶

卷一「天部上・天」に「三五曆紀」を引用する部分、

修整三五曆紀曰、天地混沌如雞子。盤古生其中、萬八千歲。天地開闢、陽清為天、陰濁為地。盤古在其中、一日九變。神於天、聖於地。天日高一丈、地日厚一丈、盤古日長一丈。如レ此萬八千歲。天數極高、地數極深。

盤古極長。後乃有三皇。數起於一、立於三、成於五、盛於七、處於九、故天去地九萬里。

の傍線部分と類似する。ちなみに『太平御覽』卷一にも、これと同文（但し二行目「混沌」の表記を「渾沌」とする）の記述がある。しかし、これらに、盤古の身体が東西南北に、目が日月になり、目の開閉で昼夜に、呼吸で寒暑となる記述はない。

この「三五曆紀」の箇所は、日本書紀の注釈書、神道書等に引用される。元応二年（一三二〇）成立、度会家行著で『聚神祇本源』の「天地開闢篇」、同じく、度会家行著で、元応二年以降の成立とされる『珊瑚集』第一「天地開闢事」、延元二、三年（一三三七・八）北畠親房著の『元元集』（『類聚神祇本源』、『珊瑚集』の影響を強く受けたとされる）には、次のようにある。

三五曆紀曰、未レ有天地之時、混沌狀如雞子。溟滓始牙、鴻濛滋萌。又曰、清輕者上為天、獨重者下為地、冲和氣者為人。故天地含レ精萬物化生。

（『珊瑚集』、『元元集』は、二行目「獨」を「濁」とする。）

また、正応六年（一二九三）までに成立の『釈日本紀』は、二箇所（注としてそれぞれに分けて引く）。

三五曆紀曰。天_レ地渾_レ沌如_レ雞子。盤_レ古生_レ其中_一、萬八千歲。天_レ地開_レ闢、陽_レ清為_レ天、陰_レ濁為_レ地。盤_レ

古在_レ其中_一、一日_レ九變。神_レ於天_一、聖_レ於天_一。

（「天地未_レ剖」項）

三五曆紀曰。日高一丈、地日厚一丈、盤古日長一丈、如_レ此萬八千歲。天數極高、地數極深、盤古極長。後乃有三皇。

數起_レ於一_一、立_レ於三_一、成_レ於五_一、盛_レ於七_一、處_レ於九_一。故天去_レ地九萬里。

（「天地相去未_レ遠」項）

さらに、康正年中（一四五五—一四五七）成立の一条兼良著『日本書紀纂疏』¹²に、天地が分かれるときの注で

三—五曆紀三曰、未タレ有三天—地—之—時、渾—沌狀チ如クニ雞ノ—子ノ—。溟滓始テ—牙、濛—瀛滋萌。

また、天地が分かれた後、神が生じたとの注で、

三—五曆—記三曰、盤古、神ニ於天ニ—、聖ナリ—於地ニ—、所—謂ル、此—書ノ神—聖ナリ也、聖トハ謂フニ神—人變—化之
迹ヲ—、其ノ神ノ之聖ナリ也：

とする。さらに、これに続けて「儒」云として「：盤古ノ事ハ、出タリニ諸異—書ニ」と、この当時、既に様々の盤古の説があつたことを述べる。また、「国常立尊」の注で

三—五曆—記三曰、天日ニ高—一—丈、地日ニ厚キ—一—丈、盤—古日ニ長キ—一—丈、如クレ此ノ萬—八—千—歳ニ、天ノ
—數極テ—高ク、地ノ—數—極テ—深シ、盤—古極テ—長シ、後ニ乃チ有リ三皇—、數ハ起テニ於—一—ニ—、立チニ於三—ニ—、成リニ於
五—ニ—、盛ナリニ於七—ニ—、處ルニ於九—ニ—、故ニ天去—レ地ヲ九—萬—一里：

と、複数の項で引く。各書、注の項が重なるのは、先に成立した注釈の影響であるが、引用する「三五曆紀」が、『芸文類聚』、『太平御覽』所収の箇所のみであることは興味深い。「三五曆紀」の説は、天地開闢の説明として、需要があつたことが伺える。

さらに、漢籍で、盤古の記述を検すると、梁の任昉の『述異記』¹³卷上に、諸説を挙げる。

昔盤古氏之死也、頭為二四岳一、目為二日月一、脂膏為二江海一、毛髮為二草木一。秦漢間俗説、盤古氏頭為二東岳一、腹為二
中岳一、左臂為二南岳一、右臂為二北岳一、足為二西岳一。先儒説、盤古氏泣為二江河一、氣為レ風、聲為レ雷、目瞳為レ電。
古説盤古氏喜為レ清、怒為レ陰。吳楚間説、盤古氏夫妻陰陽始也。今南海有二盤古氏墓一。亘三三百餘里。俗云、後人
追—葬盤古之魂—也。桂林有二盤古氏廟一。今人祝祀。

『榻鳴曉筆』と重なるのは、傍線部分のみで、目の開閉で昼夜になり、呼吸で暑寒になるという記述はない。

清の馬驢の『釋史』⁽¹⁴⁾ 卷一「開闢原始」は「五運歷年記」を引用して盤古から成立したものを詳細に述べる。

五運歷年記 元氣濛鴻、萌芽茲始。遂分天地、肇立乾坤。啓陰感陽、分布元氣。乃孕中和、是為人也。首生盤古、垂死化レ身。氣成風雲、聲為雷霆。左眼為日、右眼為月。四肢五體為四極五嶽。血液為江河、筋脈為地里。肌肉為田土、髮髭為星辰。皮毛為草木、齒骨為金石。精髓為珠玉、汗流為雨澤。身之諸蟲因風所レ感、化為黎甿。

盤古が、死に際して変化し、口から吐く息が風雲となり、声が雷霆、左目が日、右目が月、四肢が四極（東西南北の果て）、五体が五岳（東岳泰山・西岳華山、南岳衡山、北岳恒山、中岳嵩山）、血液が河に、筋と血管が道に、肉が田畑、髪と髭が星、皮毛が草木に、齒と骨が金と石、精髓が珠玉、流れる汗が雨に、身体の中の虫が多くの民になったと列挙するが、重なるのは、傍線部分のみ。ここでも目の開閉で昼夜に、呼吸で寒暑になる記述はない。

目の開閉のことは明の董斯張『広博物志』の卷九にみえる。

又五運歷年記云、盤古之君、龍首蛇身、嘘為風雨、吹為雷霆、開目為昼、閉目為夜……（以下統）

『広博物志』は、董斯張が、西晋の張華の『博物志』と宋の李石の『統博物志』をもとに、配列を改め、分類した類書であるが、現存の『博物志』、『統博物志』に、この記述は見えない。董斯張は、明代後期（一五八六—一六二八年）の人であり、『桐鳴曉筆』の成立年代（鎌倉から室町時代）からして、これを参照にしたとは考えにくい。しかし、盤古が龍の首を持ち、蛇身であったことは興味深く、これは、『燭陰・燭龍』の姿と類似する。明代までに、既に、両者は混同されていたのではないか。

ここで、二章で触れた『山海經』の「海外北經」、「大荒北經」についてみていきたい。『山海經』に、盤古の記述はないが、「燭陰」、「燭龍」の説明で、卷三「海外北經」に、

鏡山之神、名曰燭陰、視為昼、瞑為夜、吹為冬、呼為夏、不飲、不食、不レ息、息為風、身長千里。

と燭龍の目の開閉で、昼夜となり、さらに、呼吸で冬と夏になることがみえ、また、「大荒北経」にも、

西北海之外、赤水之北、有_レ章尾山_一。有_レ神、人面蛇身而赤、直目正乘、其瞑乃晦、其視乃明、不_レ食不_レ寢不_レ息、風雨是調、是燭_二九陰_一、是謂_二燭龍_一。

とある。漢籍でも混同されていくことから、「榻鳴曉筆」作者も両者を同一と考えていたのではないか。

また、李白の楽府「北風行」に「燭龍棲_二寒門_一、光曜猶_レ旦開。」と、燭龍が、北の寒門に棲み、光を放っていたことがみえ、北と、燭龍が結びついていたことが伺える。「北山云」は、これらのイメージと重なるのではないか。

盤古の目の開閉の表現は、『日本紀』巻第五に、「攝問云、異朝者、有_二巨人盤古_一。覆則為_レ天、仰則為_レ地。觀則為_レ晝、瞑則為_レ夜。壽_二八万歳_一。死後目為_二日月_一、骨為_二金石_一。脂血為_二江河_一、毛髮為_二草木_一。」とみえる。しかし、『日本紀』の点線部分、骨や毛髮の変化について『榻鳴曉筆』は、言及しない。直接的な関わりではないが、一二〇〇年代にこのような説がすでにあることは確認できる。ちなみに、鎌倉から室町までに成立したとされる陰陽道の暦注『叢書内』^{〔傳〕}巻第二に、「夫以、天元無_二容貌_一、地亦非_レ有_二三形像_一、天地一混、猶如_二雞卵_一、團圓無_レ實。(中略)爰盤_二牛王生_二平其

中_一。身長大一六萬八千由緒那也。頭圓為_レ天、足方為_レ地。胸嶮嶮為_二猛火_一、腹蕩蕩為_二四海_一、頭連_二于阿伽尼吒天_一、足跨_二金輪際底獄_一、左手過_二於東弗婆提國_一、右手逮_二於西瞿茶尼國_一。前面掩_二南閻浮提國_一、後尻接_二北鬱單國_一。呼而為_レ暑、吸而為_レ寒。左眼為_二日光_一、右眼為_二月光_一。開_レ目為_レ晝、閉_レ目為_レ昏。吐聲為_二雷霆_一、吸氣為_二風雲_一。四時行而萬物盛衰。(中略)本體龍形、沈_二廣量地_一。(…以下統)とある。胸、腹に言及すること、天竺の国で、東西南北とすること、左右の目を示すことは異なるが、傍線部分は極めて『榻鳴曉筆』の表現に近い。また、龍形であることも興味深い。しかし、いずれも『榻鳴曉筆』とは、部分的に重なるのみである。この後、『榻鳴曉筆』は、(句読点は原文に従う)

されば、易繫辭云、有_二天地_一、然後有_二万物_一。有_二万物_一、然後有_二男女_一。有_二男女_一、然後有_二夫婦_一。有_二夫婦_一、然後有_二父子_一、有_二父子_一、然後有_二君臣_一。有_二君臣_一、然後有_二上下_一。有_二上下_一、然後禮儀有_レ所_レ錯云々。

と易を引いて結論づける。「易繫辭云」とあるが、「繫辭」にこの記述はない。市古氏の頭注に「『周易序卦伝』参照」とあるように、「周易序卦伝」に

有二天地 然後有二萬物^①。有二萬物 然後有二男女^②。有二男女 然後有二夫婦^③。有二夫婦 然後有二父子^④。有二父子 然後有二君臣^⑤。有二君臣、然後有二上下^⑥。有二上下、然後禮儀有^レ所^レ錯。

と、同文があり、これを引く。この箇所は、注釈書の天地創造後の注に、よく用いられる。弘安八年（二二八五）成立の『伊勢二所太神宮神名秘書』（度会行忠著）、『類聚神祇本源』、『元元集』の、国常立尊が現れた注、『日本書紀纂疏』の伊弉諾、伊弉冊の国生みの注で、それぞれこの箇所を引く。いずれも出典を誤るものではなく、『周易序卦伝』の説であることは周知のことといえる。

『楊鳴暁筆』作者は、注釈書の知識があり、その手法を用いるが、出典を誤ったことは、興味深い。

四、『楊鳴暁筆』の「神在経」の記述

次に、『楊鳴暁筆』は、「神在経云」として、盤古の系譜を説く。盤古の父が盤石王で、三人の王子を有し、その第一王子が盤古王であること、この盤古王に、五人の子、いわゆる五帝龍王がいること、さらに、五帝龍王それぞれが有する王子とその意味を説明する。そして、この記述の後、二字下げの別記形式で、「私云、此事いまだ本書を見ず、陰陽の書にあり、追而可勘。」と本文が孫引きであることを示唆する。市古氏は頭注で「以下、『靈籙内伝』巻二に類似の記述がある」と指摘する。

「神在経」は、『四庫全書』の中に収録されておらず、著名な類書類、『初学記』、『芸文類聚』、『太平御覽』、『太平広記』などにも引用されない。また、『文選』の諸注にも書名が現れない。さらに、『大正新脩大藏経』、『中華大藏経』、『陰陽書』五

行大義」にも書名が見えない。日本の類書『塵添壺囊抄』、『明文抄』などにも引用されない。

村山修一氏は著書『日本陰陽道史総説』（塙書房）で、妙法院所蔵の神像絵巻に「神在経」なるものが引かれ、それと類似した記述が『篋篋内伝』にあると指摘する。この「神像絵巻」は、『妙法院史料』第六巻に写真版で所収されている。「神在経」の書名が現れるのは、管見に入った中ではこれのみである。

「神像絵巻」は、『妙法院史料』の村山修一氏の解題によれば、「卷子本で最初の部分は欠失し、別の紙を補って「神像」の外題がつけられ、正式名称は不明である。奥書に「観応元年庚寅三月十一日賜小野僧正興一御本」とあり、「天神七代が十一体、地神五代が五体、盤古王および五帝龍王六体、牛頭天王一体」の図像を有し、それに説明を付したものである。牛頭天王の記述があるが、『篋篋内伝』も、盤古の記述の前の巻一に牛頭天王の縁起を有しており、類似性が伺える。ちなみに、『篋篋内伝』で盤古を「盤牛」と表記するのは、牛頭天王と関連づけるためといわれている。

ここで、この「神像絵巻」(以下「絵巻」と略す)と、『楊鳴曉筆』、『篋篋内伝』(以下「内伝」と略す)の記述を比較検討してみた。三者の記述を表にし、適宜、番号を付ける。「絵巻」は、私に翻刻し、返り点、句読点を付した。但し、原本にある送り仮名は残した。

妙法院「神像絵巻」	『楊鳴曉筆』	『篋篋内伝』
(冒頭) 盤古王事依テ神在経ノ意ニ云、 娑婆世界宿ノ初ノ神王ヲ云ニ盤石王ト一。 亦云ニ大馬石王。有三人ノ子、一 者名ニ盤古王ト一、二者名ニ土府ト一、三者 号ニ土公一。初盤古王ニ有ニ五人ノ妻一。	又神在経云、盤古王の父を盤石王と名 付、三人の王子あり。第一は盤古王、次 は土府神、第三は土公神なり。其盤古王 に五人の王子あり。	記述なし (巻二の序の末尾に「…等妻ニ愛五宮采 女一、産ニ五帝龍王一。」とある。)

<p>①東方ヲ名ニ福女ト一、生スル子ヲ名クニ青帝龍王ト一。、有二十二皇子一。即子丑等十二也。</p>	<p>第一をば、青竜王と申、母は萱勢女也。此御子東方をつかさどり給ふ。十人の御子います。甲乙丙丁戊己庚辛壬癸、是なり。</p>	<p>「一、十干之事」 第一妻女號ニ伊采女一。然而生ニ青帝青龍王一、領ニ春七十二日一。妻ニ愛金貴女一、生ニ十人王子一、所謂甲乙丙丁戊己庚辛壬癸。(以下、十干の吉凶を説明する。)</p>
<p>②南方ノ妻名ニ微精女ト一。其ノ子云ニ赤帝龍王ト一。、ニ有二十人ノ子一。即甲乙丙丁等。</p>	<p>第二をば赤竜王と申、母は陽堂女也。此御子は南をつかさどり、十二人の子を生せり。子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥これなり。</p>	<p>「二、十二支之事」 第二妻女號ニ陽專女一。然而産ニ生赤帝赤龍王一、領ニ夏七十二日一、妻ニ愛昇炎女一、生ニ十二人王子一。所謂子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥。(以下、十二支の吉凶を説明する。)</p>
<p>③西方ノ妻ヲ名ニ陽堂女ト一。其子名ニ白帝龍王ト一。、有二十二皇子一。建除等</p>	<p>第三をば白竜王と申、母は福女これなり。此御子は西方をつかさどる。十二子をなせり。断除満平定取破危成取開閉直これなり。</p>	<p>「三、十二客事」 第三妻女號ニ福采女一。然而産ニ生白帝白龍王一。領ニ秋七十二日一、妻ニ愛色姓女一、生ニ十二人王子一。所謂建除満平定執破危成納開閉。(以下、十二客それぞれの説明と吉凶を記す。)</p>

④北方ノ妻ヲ名ニ惠吉女ト一。其子黒帝龍王。、ニ有ニ九人子一。一徳ニ儀等

第四をば黒竜王と申、母は若勢女也。北方をつかさどる。九人の子を生せり。謂く一徳、二儀、三生、四斂、五鬼、六海、七陽、八難、九厄これなり。

「四、九圖之名義」

第四妻女號ニ癸采女ニ、産ニ生黒帝黒龍王一、領ニ冬七十二日一、妻ニ愛上吉女一、生ニ九人王子一。所謂一徳天水上、二義虛空火、三生造作木、四殺劍鐵金、五鬼欲界土、六害江河水、七陽國土火、八難森林木、九厄土中金

*所謂其王子者一徳、二義、三生、四殺、五鬼、六害、七陽、八難、九厄也

(*楊本、岩本、國本による)

⑤中央ノ妻ヲ名ニ圍^{ツカ}勢女一。其子名ニ黄帝龍王一。有ニ二十八人子一。歸忌往亡等也。

第五をば黄竜王と申、母は惠吉女なり。中央をつかさどる。其子四十五人あり。

以下、青帝龍王から、順に凶像を載せる。黄帝龍王の凶像に「有ニ四十五人王子一」とみえる。

歳徳、歳徳合、月徳、月徳合、天恩、天赦、母倉、帰忌、往亡、厭対、厭日、九坎、血忌、元翹、月斂、重日、復日、五墓、八竜、七鳥、九廊、六蛇、戊日、滅門、大禍、狼藉、天一、大日、阿律知、斗加、天吞、地吞、歳吞、月吞、時吞、八足、不吊人、忌遠行、忌夜行、不視病、不問日、遊歳、不食時、正命。

「五、七箇善日」
第五妻女號ニ金吉女一、然而産ニ生黄帝黄龍王一、領ニ四季土用七十二日一、妻ニ愛堅窄大神一、生ニ四十八人王子一、詳註レ之。(中略)
*歳徳日、歳徳合日、月徳日、月徳合日、天恩日、天赦日、母倉日、(それぞれの説明を付すが略す)

厭日、厭對、飯亡、往亡、赤口、赤舌、
 九坎、減食、減日、沒日、血忌、無翹、
 重日、復日、八龍、七鳥、九虎、六蛇、
 五貧、八品、五鬼、六合、大禍、狼藉、
 滅門、阿律智、斗賀神、天伯、地伯、天
 道、地道、天參、地參、不遠行、不夜行、
 不問病、不視病、天一方伯、天門、八罡
 (*母倉以下、楊本、岩本、國本、慶本
 作從厭日至間日矣)

三者の記述方法が、方位、子孫、その意味の順で記すことは共通するが、『榻鳴曉筆』は、龍王を主体とし、盤古の妻を「母」、「絵巻」、「内伝」は、盤古を主体とし、「妻」と表現し、視点を異にする。また、『内伝』は、吉凶に重点を置く。

『絵巻』、『榻鳴曉筆』は吉凶を記さず、盤古の説話としてまとめる。吉凶を記さないことと合わせ、『榻鳴曉筆』は、③で、十二直の「建」を「断」と誤ることから、『榻鳴曉筆』作者は、陰陽道に対して関心が低いといえよう。

さらに異同をみていく。冒頭部、『絵巻』、『榻鳴曉筆』ともに、盤古王の父の代からの系譜を説くが、『内伝』にその記述はない。①から⑤と、全て、龍王を産んだ母の名が異なるように見えるが、『榻鳴曉筆』②「陽堂女」は、『絵巻』③の西方の妻の名と、『榻鳴曉筆』③「福女」は、『絵巻』①の妻の名と、『榻鳴曉筆』⑤「恵吉女」は、『絵巻』④の妻の名と、それぞれ重なる。『絵巻』⑤の中央の妻の名は、一字判定しにくいが、『榻鳴曉筆』①の青帝龍王を産んだ「萱勢女」と重ならないか。『榻鳴曉筆』④の「若勢女」の名のみが、『絵巻』に見えない。ただし、五女のうち三女まで、方位は異なるが『絵巻』と重なる。また、⑤で「黄竜王」の子を『榻鳴曉筆』は「四十五人」とし、『絵巻』、『内伝』と異なるが、『絵巻』の図像には「四十五人」とあり、これと重なる。

以上のことから『榻鳴曉筆』と『絵巻』の典拠の母体として「神在経」なる書があったと考えられる。但し、異同から、

「神在経」に諸本があつた可能性もあると言えよう。「絵巻」が「榻嶋暁筆」を、「榻嶋暁筆」が「絵巻」を典拠とした可能性もあるが、それは異同の大きさから、考えにくいのではないか。

また、「絵巻」、「内伝」が、「牛頭天王」と関わるのに対し、「榻嶋暁筆」が全く関わらないことは、「榻嶋暁筆」の独自性といえよう。

五、まとめ

以上、「榻嶋暁筆」における盤古の記述を概観した。「榻嶋暁筆」の盤古王の記述は、構成に注釈書の手法を取り入れながら、いくつかの漢籍の内容を組み合わせたものである。通常と異なり、今回の盤古王の説話は、特定の典拠は限定できない。部分的な表現を組み合わせ、他書の断片的な盤古を創造主の姿として総括する。「神在経」については、「榻嶋暁筆」と「神在経」の書名が見える「絵巻」とを比較し、異同は大きいものの、内容、細かな名称の重なりから、「神在経」なる書があつた可能性を指摘した。「榻嶋暁筆」に、書名がみえる意義は大きいのではないか。

また、「絵巻」、「内伝」と比較し、「内伝」は吉凶を重視し、それぞれの吉凶の説明のために、「絵巻」は次の章の牛頭天王の項で、陰陽道の説を引く伏線としてこの説を述べる。「内伝」も、巻一に、牛頭天王の縁起を有し、牛頭天王と関わりを持つ。しかし、「榻嶋暁筆」は吉凶について全く記さず、また、牛頭天王について、他の箇所でも一切記述しない。盤古の説を、何かの説明としてではなく、次の歴史に連なる系譜の流れの中で盤古を位置づけ、あくまで、盤古の物語としていることを確認した。注釈書、暦注の世界に関わる説まで、積極的に摂取することは、「榻嶋暁筆」の編纂のあり方にも通じるだろう。創世説話は、どのように位置付けされるのか。今後の課題としたい。

注

- (1) 「群書類従 第八輯」に拠る。
- (2) 日本古典文学大系(岩波書店、平成五年三月)に拠る。
- (3) 日本古典文学大系(岩波書店、昭和四二年一月)に拠る。
- (4) 水野弥穗子校注「正法眼藏(二)」(岩波文庫、平成五年一月)に拠る。
- (5) 市古貞次校注「榻嶋暁筆」中世の文学(三弥井書店、平成四年一月)
- (6) 大東文化大学東洋研究所「芸文類聚」研究班「藝文類聚(巻一) 訓読付索引」(大東文化大学東洋研究所、平成二年三月)
- (7) 「四部叢刊 三編子部」「太平御覽 一二」に拠る。
- (8) 「神道体系 論説編五 伊勢神道(上)」(神道体系編纂会、平成五年七月)
- (9) (8)に同じ
- (10) 「神道体系 論説編十八 北畠親房(上)」(神道体系編纂会、平成三年三月)
- (11) 「神道体系 古典註釈編五 釈日本紀」(神道体系編纂会、昭和六一年十二月)
- (12) 引用は「神道体系 古典註釈編三 日本書紀註釈(中)」(神道体系編纂会、昭和六〇年十二月)に拠る。また、天理図書館善本叢書(和書)部第二十七巻「日本書紀纂疏日本書紀抄」(八木書店、昭和五二年一月)をも参照した。
- (13) 叢書集成二七〇四「前定録 統録及其他十一種」中華書局
- (14) 「四庫全書」第三六五「史部 紀事本末類」(上海古籍出版社)
- (15) 「四庫全書」第九八〇「子部 類書」(上海古籍出版社)
- (16) 袁珂校注「山海経校注」(上海古籍出版社、昭和五五年七月)
- (17) 統国訳漢訳大成「李白全詩集」第一巻(誠見社、平成二年二月)
- (18) 引用は、中村璋八「日本陰陽道書の研究 増補版」(汲古書院、昭和六〇年二月初版、平成十二年一月第三版)の第五章、第二節「篋篋内伝本文とその校訂」に拠る。また、私に返り点を付した。成立については、同第一節「篋篋内伝の抄本について」、「日

本の仏教』第二期・第三卷「日本仏教の文献ガイド」(法蔵館・平成十三年十二月)等を参照した。

(19) 本田済『易』新訂中国古典選(朝日新聞社昭和四一年二月)

(20) (8)に同じ

(21) 『妙法院史料 第六卷』『古記録・古文書二』(吉川弘文館、昭和五六年二月)。私に翻刻し、返り点、句読点を付した。但し、原本にある送り仮名は、残した。

(博士後期課程修了・研究生)